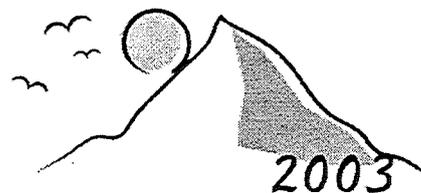




## 年頭にあたって

京都支部長 大館和郎

大図研京都支部の皆様、明けましておめでとうございます。  
今年も魅力ある企画を立てて、会員間の研修・経験交流をより  
いっそう深めたいと考えています。具体的な内容が決まりましたら、お知らせするつもりですので、積極的に参加して下さい  
よう、お願いいたします。京都支部も事務局体制を強化するた  
めに、支部委員に新しいメンバーが加わり、支部報も一新しま  
した。支部の活動も新鮮な息吹が感じられるようなものに変え  
ていきたいと思っています。



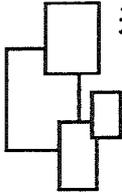
### [目次]

年頭にあたって	大館和郎	…	1
連載『本の紹介』第1回	吉田 誠	…	2
第4回図書館総合展を見て	金森孝之	…	4
大図研京都数珠つなぎ 第62回	井上敏宏	…	5
2002年度会費納入のお願い		…	6
支部報へ投稿なさいませんか		…	7
投稿規定		…	8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：http://www07.u-page.so-net.ne.jp/rg7/dtkk/



## 連載『本の紹介』第1回

## 紙とインクの香、印刷を感じる6冊

吉田 誠

今月より始まった京都支部会員による連載、本の紹介のコーナーの第一回である。さて、本の紹介と言うと、多くの人がいわゆる書評、日曜日の朝刊読書欄で目にするような一冊の本を紹介し、あれこれと論評を加えたものを思い浮かべることと思う。しかし、一冊の本の論評で一定の紙面を埋める芸当は、ウェブ上の素人書評に駄作が少なからずあるように、そう簡単ではない。紹介のみならいざ知らず、批評を加えるともなると高度な読解力や文章力が要求されるからである。私などは批評の真似事をしているうちに、どこかで馬脚をあらわすくちだ。一点あたりの言及が少なくすすむような他の方法を探した方がよさそうである。

ならばブックガイド型はどうか。雑誌で目にするものがある、「〇〇を知るための5冊」という企画のように、一つのテーマに沿って複数の本を紹介する形式だ。テーマに沿わせて本を揃えるところがちょっと難しいかもしれないが、一点あたりの字数は少なくすすむ。文章力のない私にとっては魅力的だ。テーマは多少強引でもつけてしまう。これで今回の紹介法は決まった。

ここをご覧の方は本好きの方が多いと思う。目の前に遡及入力をしなければならない図書が山ほどあろうと、移管などでしち面倒な書類が必要な本にうんざりさせられても、まあ本嫌いの人はいないだろう。しかし、本好きでも、本がどのように生まれ、私たちと出会うか、その過程については知っているようで知らないことが多いのではないかと思う。例えば出版社から取次、小売という物流のルートで、本が取次から小売へと流れることは知っていても、取次の果たす金融面での役割や出版界の商取引慣行、問題点などはいかがだろう。『出版大崩壊：いま起きていること、次に来るもの』<sup>1)</sup>という物騒ながら世相を反映しているタイトルの本も書棚にあり、流通にも興味を惹かれるところであるが、今回は本が物理的にどのように作られているのか、すなわち印刷技術について触れた本に焦点を当ててみようかと思う。図書館屋は印刷のことなど知らずともよい。かように言われる向きもあるかもしれないが、たまには紙とインクの香にひたるのも悪くはないだろう。

私たちが普段購入する本は、紙に文字を定着（印刷）させ、その紙を綴じ合わせた本、いわゆる刊本である。印刷と言えば、まずグーテンベルグが発明したとされている活字印刷が思い浮かぶが、きょう日このような手のかかる方法で本が印刷されることは通常ない。印刷については、グラビア印刷、オフセット印刷などの印刷方法があることは知っているのだが、それらの印刷法がどのようなものであるのか、その仕組みを理解できているかとなると、これまたおぼつかない。

そこで『印刷に恋して』<sup>2)</sup>という本を選んで目を通して見た。著者の松田氏は編集者であり、その手になる文章も読み手への目配りがなされている。しかし、図を欠いた家具の組立図がどうしてもわかりやすさを欠いてしまうように、機械のカラクリを文章だけで説明するのは難しい。それを補うのが内澤氏の細やかなイラストだ。文章とイラストがコンビを組むことで各種印刷技術のカラクリをわかりやすく伝えてくれる。これがこの本のウリだ。以下に一例を挙げよう。

「オフセット印刷とは、版からゴム製のブランケットに一回刷り、それを紙に転写する…（中略）…インキがいったん紙から離れて（OFF）、ゴムを経由して紙につく（SET）ところからオフセットと呼ばれるようになったらしい。」<sup>3)</sup>長めの引用であるが、オフセット印刷を文章で説明するところようになる。この文章で原理は把握できよう。だが、どれだけの人間が機械の実際の姿をイメージできるだろうか。そこでイラストが登場し、われわれ読み手は文字通り一目瞭然、機

械の実際の姿をつかむことができるようになるわけだ。文章とイラストのコンビの相乗効果の程は私の文章では伝えられず、本書を手にとり眺めていただくしかないのが残念であるが。

このように『印刷に恋して』は、随所で文とイラストが絶妙なコンビネーションで相補うことにより、活版や、オフセット、グラビアなどの各種印刷方法の原理と実際のカラクリをわかりやすく説明してくれる。最後に、組版の変遷についての言及があり、簡単ながら今後の組版の展望も示されている。電子本時代の出版についても、考えるきっかけを与えてくれるだろう。

今後の印刷技術の動向、特にオンデマンド出版について知りたければ、『オンデマンド出版の実力(本とコンピュータ叢書)』<sup>4)</sup>の一読をお薦めしたい。オンデマンド出版はイメージが一人歩きしている感じがどうにもぬぐえない。特徴や性質をきっちり把握しておくことは、イメージに振り回されないためにも、無駄ではないはずだ。

『印刷に恋して』は、現在の印刷技術についての本だが、幕末から現代に至るまでの日本語印刷技術がどのような変遷を経てきたかをたどるのならば、文庫本で気軽に読むことのできる『日本語大博物館(ちくま学芸文庫)』<sup>5)</sup>もいだろう。印刷技術については、活版印刷、謄写版(ガリ版)、写植機や日本語ワープロの発明過程までしか触れられていないが、文庫本にしては珍しく、一ページあたり一つ以上の図版が掲載されているところに、作り手の気合を感じる。カバーのタイトルに「悪魔の文字と闘った人々」と添えられているのだが、本書は日本語をどう表現するか格闘した人々を追った本である。印刷などの技術面で格闘した人々だけではなく、田中館愛橘などに代表される日本語ローマ字化運動や新しい日本語の発明運動など、言語体系面で格闘した人々にもスポットを当てているところも興味深い。

一冊の本がどのような過程を経てできあがるのか知りたければ、興味の向きが限定されるので広く薦めるにはためらうが、『「時刻表」舞台裏の職人たち(マイロネ Books)』<sup>6)</sup>も挙げておく。時刻表は1925年創刊(JTB版)の歴史を持っているが、これは活字、写植、DTPと三世代の印刷技術で印刷されてきた定期行物であることを意味する。各世代の時刻表の作成過程を追ったこの本に触れることで、世代ごとの印刷技術の相違をつかむことができるだろう。

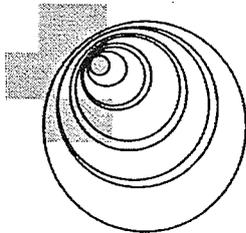
ここまでで紹介した本はノンフィクションであるが、印刷業界に関するエピソードを盛り込んだエッセイや小説もある。最後にこれらを紹介して終わりとしたい。一冊はエッセイ『活字狂想曲(幻冬舎文庫)』<sup>7)</sup>。小説の方は『永遠も半ばを過ぎて(文春文庫)』<sup>8)</sup>である。どちらも文庫本であり、内容も通勤の一時や寝床で頭をほぐす一冊にふさわしい本だ。

#### <参考文献>

- 1) 『出版大崩壊：いま起きていること、次に来るもの』 小林一博著 東京：イースト・プレス、2001.4 317p；20cm ISBN：4-87257-234-3  
…新刊バブルや不公正な商取引慣行により危機的状況にある出版界を解説、論じている本。処方箋も示されているが、悲観的な私などは出版界、お先真っ暗ではないかと感じさせられてしまう。
- 2) 『印刷に恋して』 松田哲夫著 イラストレーション：内澤句子 東京：晶文社、2002.1 198p；21cm ISBN：4-7949-6501-X  
…印刷技術の原理とカラクリはこれでほぼつかむことができる。内澤氏の細かいが暖かみのあるイラストもうれしい。第三回ゲスナー賞銀賞受賞。
- 3) 『印刷に恋して』 p. 80 より
- 4) 『オンデマンド出版の実力(本とコンピュータ叢書)』 赤木昭夫 [ほか] 著；「本とコンピュータ」編集室編 東京：大日本印刷株式会社 ICC 本部 東京：トランスアート市谷分室(発売)、2001.10 172p；21cm ISBN：4-88752-154-5  
…各国の状況の解説から、電子時代の読書論まで幅広い内容。図書館も情報発信しろと言われる時代、小部数出版に本領発揮できるオンデマンド出版と、図書館の今後の関係を考える上でも読んでおきたい。

- 5) 『日本語大博物館 (ちくま学芸文庫)』 紀田順一郎著 東京：筑摩書房，2001.9 335p；15cm ISBN：4-480-08661-7  
…印刷技術や言語体系面で日本語表現を革新しようとした人々にスポットを当てる。プロジェクト X 的なノリ。図版がてんこ盛り。
- 6) 『「時刻表」舞台裏の職人たち(マイロネ Books)』 時刻表 0B 会編 東京：JTB，2002.10 190p；19cm ISBN：4-533-04438-7  
…印刷だけではなく、校正など編集過程も触れているのがうれしい。ただ難を言えば、昔の時刻表の製作過程のルポを再掲したところか。「いま」の編集過程のルポこそ欲しかった。
- 7) 『活字狂想曲(幻冬舎文庫)』 倉阪鬼一郎著 東京：幻冬舎，2000.8 270p；ISBN：4-344-40263-4  
…人気ミステリ作家が印刷会社の校正者として働いていた時代のエッセイ。誤植話や周りの奇人のことなど笑いどころが多い。QC など日本のカイシャの話には、役所勤務でよかったと思わされる。
- 8) 『永遠も半ばを過ぎて(文春文庫)』 中島らも著 東京：文芸春秋，1997.9 268p；16cm ISBN：4-16-758501-4  
…写植オペレータ、編集者、詐欺師が主人公の小説。舞台は印刷、出版業界。本の出版を詐欺師がリードするコメディ。印刷や出版だけでなく、詐欺業界(?) のことも楽しめ、お得感がある。

よしだ まこと (京都大学工学研究科物理工学系図書室)



## 第4回図書館総合展を見て

金森 孝之

2002年11月20日より22日まで、東京駅前の東京国際フォーラム、展示ホールにおいて、「第4回図書館総合展」が開催されました。21日のみでしたが、フォーラムにも参加いたしまして、展示も見学いたしました。東京国際フォーラムは、巨大な船底のようなガラス張りの天井のある建物で、JR東京駅からも近い便利な場所にあります。総合展は、図書館、そして図書館に關係する企業、団体など120くらいが参加する一大イベントでした。図書館の建設から設備、書店、製本、人材派遣までと図書館をめぐる多数の企業、団体のブースがありました。図書館業務を行うためには、こうした企業をうまく活用することは必須のことであると思います。すでに4回目とのことですが、この総合展は、意義のある展示会だと思います。特に、興味を持ったのは、多数のフォーラムでした。「IT時代の知識(ナレッジ)探索法 講師：山根一眞」に始まりまして、おもしろそうなフォーラムのてんこもり状態です。詳細については、(<http://www.j-c-c.co.jp>)、を見てもらいたいのですが、見ると12月12日には紹介記事はなくなりました。さて、ここまでが枕でして、いよいよ私の参加したフォーラムについてですが、「新たなる知の宝庫へ～インターネット情報資源への取り組み 講師：広瀬信己(国立国会

図書館関西館事業部電子図書館課)」に最も興味を惹かれました。関西館の開館以来でしょうか、国立国会図書館は、積極的に新規事業に取り組もうとされているようです。インターネット上には、膨大な知識、情報が公共的に流通しておりますが、情報資源の平均寿命は、44日とのことです。そこで、「フロー」としてのインターネットではなく、その情報を重要な文化資産と考えれば「ストック」という枠組みが必要ではないかということです。国立国会図書館では、インターネット上の情報のごく一部分ですが、すでに蓄積を開始しているとのことです。この動き自体は、既にアメリカ、イギリスなど諸外国では、インターネット・アーカイブ、MINERVAプロジェクトなどという名前で実施されているとのことです。しかし、ホームページをそっくりコピーしておいていいというわけではなく、その前に著作権の許諾をとることや、リンクがはりめぐらされているホームページのうちどこまでが、作成者の責任が及ぶかを判断するなど苦勞も多いようです。あの5月、日本中が沸いたワールド・カップの公式サイトもすでにアーカイブとして保存されているそうです。というところで、一度、このアーカイブを覗いてみてください。名称は、「国立国会図書館インターネット資源選択的蓄積実験事業 (WARP)」というそうです。ホームページは、(<http://warp.ndl.go.jp>)、です。

#### 追記

図書館総合展の案内がホームページでもう見ることができないと書きましたが、その後調査しますと、以下のようなことが判明しました。ここで総合展のおおよそが分かりますので、参照ください。

「東京国際フォーラム」のサイト (<http://www.tif.or.jp/forum/>) から過去の催事記録 > 2002年11月 > 11/20(水) ~ 22(金) 第4回図書館総合展と手繰っていきますと (<http://www.j-c-c.co.jp/lf4.htm>) にリンクしています。このページは開催前の宣伝ページなので、(<http://www.j-c-c.co.jp/>) のトップからはリンクがなくなったのだと思います。ここで「1. 出展募集要項 2. 無料招待券申込書 3. 出展者一覧 4. フォーラム一覧 5. 会場案内」などが確認できます。

かなもり たかゆき (京都大学経済研究所図書室)

#### 連載コーナー

### 大図研京都数珠つなぎ 第62回

京都大学医学図書館

いのうえ としひろ  
井上 敏宏

明けましておめでとうございます。

昨年9、10月合併号 (No. 207) から当支部報の編集を担当しております京都大学医学図書館閲覧掛の井上です。日頃よりお世話になっております。常に文章は苦手と申ししておりましたのに他の京都支部委員の皆さんが既に原稿を書かれてしまいましたので今回、大図研新人である私が「数珠つなぎ」を書く破目になってしまいました。

文章を書くのが苦手。これは実は無理からぬことなのです。私は今年3月いっぱい図書館



を及ぼします。  
会員の皆様におかれましては、会費納入率の向上にご協力いただきますようお願いいたします。

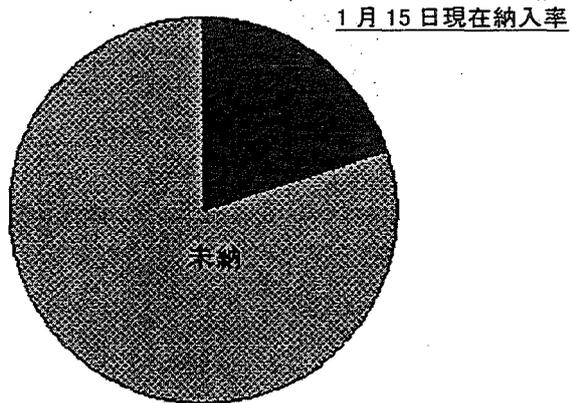
記

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記講座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904  
大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は京都支部財政担当・吉田（京都大学物理工学系図書室）までお願いいたします。  
myos@m02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp



支部報へ投稿なさいませんか



京都支部では会員の皆様からの投稿をお待ちしております。  
自由なテーマで書いていただく連載コーナー「数珠つなぎ」や今回新しく始まりました連載コーナー「本の紹介」、その他大学図書館に関することなどで日頃お考えのことやイベント参加の感想、見学の報告など、どのようなことでも結構ですので是非、ご投稿ください。

記名投稿のみ採用とさせていただきます。原稿受領後、採用の際にはあらためてご連絡申し上げます。

## 投稿規定

### (1) 規格

- ・横書き 1 行 41 字、表題部分も入れて 48 行が 1 ページの分量です。
- ・段落間は 1 行あけてください。
- ・段落はじめは全角 1 文字分あけてください。

記事は以下のとおりに構成します。参考までお知らせします。

(1 ページ = 1 行 41 字 × 48 行)

記事タイトル = サイズ : 14 ポイント・フォント : MS ゴシック  
中見出し(+投稿者名) = サイズ : 12 ポイント・フォント : MS ゴシック  
小見出し = サイズ : 10 ポイント・フォント : MS ゴシック  
本文 = サイズ : 10 ポイント・フォント : MS 明朝

### (2) 送付方法

入力作業負担軽減のため、原稿はできるだけ電子媒体でお願いします。

#### ・電子メールで送信の場合

tinoue3@a0016115.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

編集担当 (井上) 宛におねがいします。ウイルス感染被害の拡大防止のためファイルの添付は極力お避けいただき、本文としてください。

#### ・大図研京都支部ホームページから送信の場合

「支部報投稿」のページから直接、送信できます。

<http://www07.u-page.so-net.ne.jp/rg7/dtkk/up.htm>

#### ・プリントアウトした原稿もしくはフロッピーディスクを郵送の場合

(宛先) 〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町

京都大学医学図書館閲覧掛 井上敏宏

#### ・原稿をファクシミリで送信の場合

FAX 番号 075-753-4318 京都大学医学図書館閲覧掛・井上まで

### (3) 署名

氏名、氏名ヨミおよび所属の正式名称を必ずご記入ください。

よろしくお願い致します。